

(令和7年8月20日掲載)

# 外国人の人権と私の原点



## 廣瀬 留美子 (ひろせ・るみこ)

沖縄県出身。大学卒業後はパラオへ JICA 青年海外協力隊として現地小学校で算数教育に従事。結婚後はアフリカのザンビアで子育て開始。約 12 年前、夫の仕事を機に高知県へ移住。高知県国際交流協会、JICA 国際協力推進員を経て、現在は高知県外国人生活相談センターのセンター長兼相談員。2025 年 3 月に県内で初めて外国人支援コーディネーター資格取得。

「チキトク」の電報を受け、10 代の祖母は大阪での師範学校を一時中断し、3 か月の船旅を経て南洋コロールにたどり着いた。そこに待っていたのは、ぴんぴんしていた父の姿一。

「だまされた」と感じながらも祖母は結婚のためコロールにとどまり、学のない夫に読み書きを教えながら 11 人の子を育てた。戦時中に 2 人の命を飢餓で失うという壮絶な時代。8 番目に生まれたのが私の母である。

私は沖縄県宜野湾市で生まれ、普天間基地の騒音とともに育った。「外国」は生活のすぐ隣にあった。だが、東京で受けたアルバイト面接で「本籍が沖縄ですが、日本語は話せますか？」と聞かれた時、自分のアイデンティティーに大きな衝撃を受けた。沖縄がまだ“外国”として認識される現実。標準語を話す自分、沖縄の方言「うちなーぐち」を話せない自分、琉球の歴史を知らない自分、基地問題に無関心な自分。そんな“●●な自分”に戸惑った。

母が生まれたパラオもまた、かつて日本の統治下にあり、終戦後はアメリカの施政権下となった。私は自らのルーツに向き合うために JICA の青年海外協力隊に参加し、2003 年から 2 年間、現地の小学校で算数を教えた。75 歳のホストマザーは日本語を流暢に話し、日本統治時代の思い出を大切に語ってくれた。しかし同時に、「戦前、日本がパラオに何をしたか知っているか？」と問いかけられ、私は己の無知に恥じ入った。文献と聞き取りを通して、歴史と向き合う日々が始まった。

沖縄、内地（本土）、パラオ、ザンビア、そして高知と移り住むなかで、私は異文化に自らを溶け込ませ、現地の暮らしに寄り添うことで多くの視点を得た。文化とは、生活の中にあるものであり、人が何を大切に生きているのかを知る鍵になる。そして、外国人と共に生きるうえで重要なのは、彼らから学ぶだけでなく、こちらが大切にしていることを伝える努力である。そのためには、私たち自身が日本や高知についてよく知らなければならない。

現在、私の暮らす高知県には 6,848 人の外国人が暮らしている（2024 年 12 月現在）。相談員として日々外国人やその支援者から多様な相談を受けるなかで、差別や誤解による苦しみに心が痛むこともある。一方で、相談を経て前に進む姿に喜びを感じる瞬間も多い。

外国人の人権とは、決して「特別な権利」ではない。それは、私たち一人一人が日々の暮らしの中で「隣の誰か」を思いやること。異なる背景を持つ人々と心を通わせ、ともに地域社会をつくることに他ならない。多文化共生とは互いの違いを認め合い、尊重する関係性の中に育まれていくものだ。私はこれからも、高知という土地で暮らすすべての人が尊厳を持って生きられるよう、自分自身を耕しながら寄り添っていききたい。